

10 高温期の換気、高温対策

晴天日は、ハウスの出入口、サイド、妻面上部などの開口部を可能な限り開放し、ハウス内の温度を下げる。

梅雨明けを目安に、遮光率 20～30%の寒冷紗で被覆したり、塗布剤の吹付けにより、ハウス内温度が 30℃以下になるように努める。細霧冷房、循環扇、クラウン冷却などが行える場合は、気温や地温を低下させるようにする。

11 収穫済み花房の摘除・摘葉

8月に入り収穫ピークを過ぎたら、収穫済みの花房は随時取り除き、古葉を摘葉する。成り疲れを起こし、茎葉が倒れて草高が低くなった場合は、9月以降に収穫する芽を2～3芽に整理するが、一度に多くの芽や葉を取り除きすぎないようにする。

草勢が維持できていても、多くの芽を残すと細い花房・小果となるので、クラウン径の細い弱小腋芽から発生する細い花房は摘除する。

9月以降に出蕾した花房は摘花・摘果しない。

12 越冬直後の管理

～ 枯葉・芽数の整理とハダニ防除 ～

(1) 枯葉、芽数の整理

冬越しする作型では、消雪直前頃に屋根ビニールを張り、保温と換気をして土を乾かす。通路が乾いたら、枯葉と芽数の整理を行う。6～7本に増えた芽のうち2芽を残し、他は取り除く（夏で収穫を終える場合は3芽残してもよい）。前年に収穫した太いクラウンや立ち上がった芽は、地際から折り取る。

残す芽

- ・ 土の近くから出ている、横に伸びそうな若い芽
- ・ 同じ方向に伸びそうな芽は、どちらか1本にする
(生長した時に、光が当たりやすくなるように)



4月2日 株整理中



4月16日 株整理前



4月16日 株整理後

(2) ハダニ防除

枯葉、芽数の整理が終わったら、直ちにハダニの防除を行う。ハダニは葉裏や株元に寄生しているが、マルチに密着した短い葉には薬剤がかかりにくいので、丁寧に散布する。新葉が立ち上がってきたら、マルチに密着した葉を早めに摘葉する（残さは、ハウスの敷地から離れた場所で処分する）。

4月上中旬、葉が4枚以下の頃に咲く花は、低温障害を受けて着果できないことが多い。また、訪花昆虫が少なく、授粉できずに先詰まり果などの奇形果になることもある。早すぎる花房は取り除き、商品にならない花や幼果は摘果する。



低温障害（ブラックアイ）

VI 参考文献・参考資料

1 自動施肥かん水編

- (1) 青木宏史, 梅津憲治, 小野信一編 「養液土耕栽培の理論と実際」(誠文堂新光社)
- (2) 株式会社エドビ青森営業所 佐藤佑樹「自動灌水に使用する点滴チューブとハウス内の灌水量の計算」(令和2年第1回専門技術強化研修(野菜))
- (3) 全農 耕種資材部 グリーンハウス推進室「かん水機器の選定のポイント」グリーンレポート No. 656 (2024年2月号)
- (4) 中南地域農林水産部 「津軽のミニトマト自動施肥かん水装置組立てマニュアル」(写真、動画(QRコード)により組立作業の詳細が紹介されている)
- (5) 2017 OATアグリオ 「農業用製品ガイド」

2 栽培管理編

- (1) ホクサン株式会社植物バイオセンター 「四季成り性いちご品種「すずあかね」土耕栽培マニュアル平成29年版」
- (2) 齋藤弥生子著 「イチゴづくりの基礎と実際」(農文協)
- (3) 川城英夫編著 「新 野菜づくりの実際 果菜Ⅱ(ウリ科、イチゴ、オクラ)」(農文協)

